

## 30年ぶりに 故郷和歌山で暮らし

岸本周平

(元内閣府政策参与)

生まれてから、高校を卒業するまで和歌山市で18年間を過ごしてきました。その後、東京での生活が30年続きました。その間、岐阜県や米国のニュージャージー州でも暮らしましたが、昨年夏、衆議院総選挙に出馬するため、30年ぶりにふるさとに帰ってきました。

選挙には負けましたので、今は、無職浪人の身で、次期総選挙に備えています。和歌山市で生活を、いわゆるドブ板政治活動をしています。が、ふるさとには有難いもので、小、中、高校の同級生達に支えられて何とかやっています。

39 エッセー特集・夏がくれば思い出す

夏になると思い出すのが、母方の親戚の家に遊びに行った小学4年生の夏休みの記憶です。母親の実家は和歌山市の南にある海南市で、かなり田舎の町でした。そこから少し山の奥に入っていくと電気だけはかろうじて来ていますが、ガスも水道もない生活が40年前にはありました。

夏休みには母親の実家に泊まって、川で泳いだり、山に登ったりするのが楽しみでした。流れのある川で泳ぐのは、プールとは全く違うスリルがあります。4年生の夏に、そこから、いとこの同級生と一緒に、彼のおばあちゃんの家がある「海老谷」という山奥の村に行きました。山から湧き出る清水を使って生活していました。ガスなどありません。驚いたことに、清水を溜める甕の中に川魚が数匹泳いでいました。水が常に注ぎ込まれているから大丈

夫なんでしょうか、その水を飲料用に使うのです。電気は来ていたが、田舎屋なので、トイレが別棟でした。夜中にトイレに行くときに、周りが真っ暗でトイレの周りだけがうっすらと見えるくらいの電球が点いていましたが、怖くて怖くてチビリそうでした。

その日は、生まれて初めて、星が落ちてくるような「明るい」星空を見ました。翌日は早朝から、かぶと虫、クワガタ、玉虫が取り放題のワンダーランドに繰り出しました。人口40万人の県庁所在市の中心街で育った田舎の「シティーボーイ」の私にとっては、信じられない体験だったので。

思い返せば、私達の頃の小学生には塾もお受験もなく、夏休みはひたすら遊ぶだけの毎日でした。田舎で、公立の学校に通っていても、高

校生くらいから勉強を始めれば何とか志望の大学に入れるのんびりした時代でした。

今、和歌山市内で戸別訪問をしていても、子ども達が遊ぶ姿を見かけることがありません。夕方、コンビニで買ったおにぎりを食べながら塾に通う小学生と出会うことはありません。夜の10時、11時に塾の前は、子ども達を迎えに来る保護者の車でごった返しています。今の子どもは外で遊ばないですから、体力も落ちていきます。40年前、山奥の海老谷まで、私といとは半日かけて歩いて行きました。当時はそれが当たり前でした。

子育てや教育について、「何かが違う、おかしい。」とみんなが思っているのに、変えられない世の中。今の子ども達の「夏の思い出」って、どんなものなのでしょうか。